ある男と胴付きまりさの話

アインスト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

駄文ですがよろしくお願いいたします。

楽しんでいただけたら嬉しいです。

それからなるべく批判コメントは控えて欲しいです。

創作意欲が削がれるので。

誤字脱字はあった場合報告してください。

原作を知ってから読んでいただけるとより楽しめます。

さらにこういった作品が苦手な方はブラウザバックを推奨します。

それではゆっくりしていってね！

目次

第一話　ビギニング　1
第二話　それから　3
第三話　久しぶり　7
第四話　仕事仲間　11
第五話　エンカウンター　15
番外編　雄吾とルーミア　19
第六話　ぶっ飛ばす！　25
登場人物紹介　29
第七話　おてんば娘　32
第八話　それぞれの日常　36
第九話　シスコン兄貴見参!?　前編　41
第十話　シスコン兄貴見参!?　後編　44
第十一話　まりさ、おつかいに行く。　47
第十二話　龍次の生活　51
第十三話　そろそろ　54
第十四話　答　58
第十五話　対話　61
番外編　雄吾とルーミア②　65
第十六話　討伐　前編　69

第一話　ビギニング

・・・・　少し俺自身の話をしよう。
まず、俺は何者か。
俺は《不知火　零士》。人間だ。
しかし、《ゆっくり》のハーフでもある。
何故か。
ある時、一人の男と一匹の胴付きゆっくりが恋をした。
いつしかそれは〈愛〉となり、俺が生まれた。
だが、俺の父親は俺が生まれて６年後に亡くなった。
ちなみに俺の母親は《ゆっくり射命丸》こと、
《不知火　文》となった。
父親いわく『その方が家族らしくて良いだろ？』との事だった。
その父親が亡くなってから１２年後。
自宅
文「ほんとにいくんですか？」
零士「ああ。心配いらないよ。」
玄関にてゆっくり文が我が子を心配する。
それもそうだ。
実際《ゆっくり》は家族を大事にする生き物だ。
父親の葬式の時一番悲しんでいたのも母さんだ。
まあ中には家族を見捨てるゲスもいる。
文「加工所に着いたら一報くださいね？」
零士「わかったよ。」
文「それから、ハクレイさんによろしく伝えといてください。」
零士「任せて。」
ハクレイとは誰か。
それは俺が１０歳頃にさかのぼる。

８年前
まりさ(ゲス)「ゆっへっへっへっ！このまりささまにたたかいをい

どむなんてばかなにんげんなのぜ！」
零士（１０歳）「いててて・・・　ゆっくりだからって油断してた・・・」
俺が散歩に出かけるといきなり野良ゆが「さっさとあまあまよこすんだぜ！」っていうもんだから軽く叩いてやった。
けど何故かわからないが、顔面に体当たりをくらわせてきた。意外と痛かった。
もうダメだと思った瞬間、後ろから「伏せて！」って聞こえたから伏せたらそのまりさは一刀両断されていた。
顔をあげるとそこには少し変わった胴付きれいむがいた。
ハクレイ「あなた、大丈夫？」
零士（１０歳）「は、はい・・・」
俺は胴付きれいむに助けられたのだ。
その後、急いで駆けつけた母さんに事情を話すと、
文「ありがとうございました！なんとお礼したら・・・」
ハクレイ「気にしないで。私はただあの子を助けたかった。それだけよ。」
胴付きれいむは冷めていた。でも俺はその時からハクレイさんに憧れ、毎日技を教えてもらった。
ゆっくりの殺し方、虐待方法などを教わった。
するとある日。
ハクレイ「ねぇ、零士君」
零士「なんですか？」
ハクレイ「大人になったら加工所で働いてみない？」
零士「え・・・？」
俺はその瞬間少し戸惑った。しかしすぐに
零士「はい！ぜひ働かせてください！」
ハクレイ「ふふっ。楽しみにしているわ。」
俺の返答にハクレイさんは微笑んだ。
ここまでが１０歳頃の思い出だ・・・・。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・

第二話　それから

第二話　それから
あれから2年。
俺の自宅には1つ、変化があった。
『ガチャリ』
零士「ただいま」
すると奥の方からぱたぱたと胴付きが出迎えに来た。
まりさ「零士兄！おかえり！」
胴付きまりさは俺の荷物を預り、今日の出来事を話し始めた。
零士「ん？なんだ、餡子の匂いが…」
まりさ「あ、あのね、いきなり野良がおうちせんげんしてたからつい…」
俺はリビングに入るなり状況を察した。
零士「あ～、なるほど、そういう事か」
まりさ「…　怒ったり…　しない？」
俺のまりさには《だぜ言葉》がない。
その代わり他の男らにとってはけしからんと言えるほど美人だった。
零士「怒ったりしないさ。むしろありがたい」
まりさ「ほんとに怒ってない？」
まりさは俺の顔色を伺う。
零士「ああ。本当に怒ってないよ」
まりさ「よかったぁ。じゃあそろそろご飯にしよ？」
零士「そうだな。そうしようか。」
そもそも何故胴付きまりさがいるのか。
それは2年前、俺が加工所で働き始めて3ヶ月後、森にてゆっくり駆除をしていると、周りのゆっくりにいじめられている胴付きまりさがいた。
まりさ「うぅ…　痛いよぉ…」
ゲスゆが次の言葉を発する前に俺はハクレイさんから受け取った

《ゆっくり駆除用単発式銃　ディクテイター》の引き金を引いた。
れいみゅ「ゆきやきや！ゆっくちできないげしゅはち・・・『パンッ！』ゆべぇ!?」
零士「お前らが死ね、このゲス饅頭共が」
その後数分間に渡ってゲスゆを駆除し続けた。
まりさ「あ、あの、もしかしてあたしも・・・」
まりさは己に起きる事を覚悟していた。
しかし俺はこう言った。
零士「俺と・・・　一緒に来るか？」
まりさ「え？」
まりさにはわからなかった。
なぜ加工所の人間がゆっくりを助けるのか理解できなかった。
それからだ。俺と一緒に暮らし始めたのは。

ー現在
まりさ「今日は零士兄の好きな冷やしうどんにしてみました～！どう？」
零士「だいぶ料理が上手くなったな。嬉しいよ」
俺はまりさの作ってくれた冷やしうどんを食べ始める。
零士「ん、美味い！すごいな、ここまで上手くなるとは・・・」（モグモグ）
まりさ「本当!?よかったぁ・・・」（ホッ）
すると俺の携帯から着信音が鳴り出した。
『ピリリリッピリリリッピリリリッ』
まりさ「ほえ？零士兄、メール来たよ？」
零士「どれどれ・・・・」
メールを確認すると内容は母さんからだった。
零士「ゲッ!?マジかよ・・・」
どうやら1週間後に俺の家に来るとの事だった。
まりさ「またお母さん？」
零士「ああ・・・。少し物を片付けないとなぁ・・・」

俺の母さん・・・《不知火　文》もとい《ゆっくり文》はとにかく口うるさい。
「物を散らかすな」だの「ちゃんと風呂入ってるか」だの。
そういった具合で心配してくる。
まりさ「あたしも手伝うよ？」
零士「それは助かる。ところでさ・・・」
俺はガラスケースに入れられたでいぶ達に目を移す。
零士「あれ、どうすんだ？」
まりさ「零士兄のお好きなように？」
零士「めんどい。まりさ任せた」
まりさ「はーい」
ガラスケースに入れられたゆっくりはでいぶが一匹、
赤れいみゅが二匹、子れいむが一匹、子まりさが一匹。
まりさ「とりあえず親と子で分けたよ。」
零士「チビ達は寝てんのな・・・」
まりさ「うん。騒がれたらうるさいし」
ガラスケースに閉じ込められたでいぶが喚く。
でいぶ「ぐぞにんげんごごがらだぜぇぇぇぇ!!」
零士「オワァ・・・見事なゲスっぷりだな・・・」
まりさ「どうする？このでいぶ」
俺はうーんと少し考え、結論を出した。
零士「テキトーにぶち殺しといてくれ」
でいぶ「どぼじでぇぇぇぇ!?」
まりさ「わかったよー、えいっ！」『ブスッ』
でいぶ「ゆっ!!ぎゃあああ!!」
その後、でいぶの叫び声がお隣まで聞こえた事は言うまでもない。
夜。
まりさ「はぁ・・・でいぶのせいで餡子まみれだよぉ・・・」
零士「うわっ、大丈夫か？風呂入って来いよ」
まりさがどのようにでいぶを殺したかは読者の想像におまかせする。

まりさ「じゃあ零士兄、一緒に入ろ♪」
零士「はぁ？」
まりさ「一緒に入って洗いっこ・・・ うふふふ・・・」（じゅるり）
零士「悪いがちょっとまだやる事あるからまた今度な」
まりさ「ちぇっ、ってまた今度？」
零士「あっ・・・・」
地雷踏んだなぁ・・・・。
零士「わかったよ、少し待ってろ」
まりさ「わ～い！零士兄とお風呂～！」
まりさの可愛さには敵わないなぁ・・・・。
仕方ないか。
ーお風呂にて。
零士「頼むからこっち向くなよ？」
まりさ「え、なぁに？」
まりさの頭にチョップする。
『ペシッ』
まりさ「ゆっ、痛いなぁ～」
零士「こっち向くなと！」
まりさ「はーい」
俺達の日常は今日も続く。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・

第三話　久しぶり

第三話　久しぶり
零士「ふぅ、とりあえずこんなもんか？」
まりさ「だいぶ片付いたね・・・」
俺達が何をしていたかというと、今日は俺の母親が来る日なので片付けをしていたからだ。
零士「そういえばさ、あのチビ共どうすんだ？」
まりさ「今日のおやつでもどう？」
確かに手頃なサイズだけどなぁ・・・・・。
野良ゆを食べるのは少し気が引けるなぁ。
零士「調理すんのめんどいしなぁ～」
まりさ「じゃああたしがやる～！」
零士「んじゃ頼んだ」
まりさはキッチンへと向かい、調理を始める。
赤れいみゅ「ゆ？きゃわいいれいみゅがゆっくちおきちゃよ？どうちておきゃーしゃいにゃいの？」
赤まりしゃ「まりしゃはまりしゃだじぇ！おかざりのないゆっくちはゆっくちしにゃいでちぬのじぇ！」
まりさ「はぁ～、これだから赤ゆは・・・」
まりさは文句を言いながら包丁を赤れいみゅに差し込む。
『サクッ』赤れいみゅ「ゆ？」
すると次の瞬間、ワンテンポ置いて赤れいみゅは叫びだした。
赤れいみゅ「ゆびゃあああ!!れいみゅのおめめしゃんぎゃあああ!!」
赤まりしゃ「い、いもーちょぉぉぉぉ!?」
こいつらの叫び声は実に心地よい。リアクションも面白いし。
まりさ「ねぇ～、零士兄～！何がいい～？」
零士「んじゃあ頭かっさばいて中身の餡子を食うタイプで」
まりさ「オッケー！」
零士「ついでに目も潰しておいてくれ！」

まりさ「はーい！」
まりさは赤れいみゅのもう片方の目も潰そうとする。
まりさ「えいっ！」『サクッ！』
赤れいみゅ「ゆんぎゃあああ!!れいみゅの!!れいみゅのおめめしゃんぎゃあああ!!」
赤まりしゃ「いもーちょをいぢめるにゃぁぁぁ！ぷきゅーしゅるのじぇ!?」
儚くも赤まりしゃは抵抗する。
零士「スピーディーに済ましてくれ～」
まりさ「わかったよ～！」
まりさは棚から爪楊枝を取りだし、赤まりしゃの目を潰す。
赤まりしゃ「ゆっぴぃぃぃぃぃ!!まりしゃのほーしぇきしゃんにょよーなおめめしゃんぎゃあああ!!」
まりさ「うっさいなぁ～、よいしょ」『ザクッ』
赤れいみゅ・まりしゃ「ゆんやぁぁぁぁぁ!!!!」
れいみゅ「あたましゃんぎゃあああ!!」
まりしゃ「あたましゃんいぢゃいぃぃぃ!!」
まりさはサッと皿に盛り付け、テーブルに出す。
まりさ「ホイップクリームもいる？」
零士「あるなら貰おうかな？」
まりさ「わかったよ～、今持って来るからぁ～」
まりさは冷蔵庫からホイップクリームを取りだし、トッピングしようとする。
しかし。
まりさ「あ、あれ？上手く出てこないなぁ？」
零士「どうした？」
まりさ「ホイップクリームが上手く出てこなくて・・・・　もっと強く握れば出てくるかな？」『グッ！』
零士「あ、バカ!!そんな握ったら！」『ブビュルッ！』
ホイップクリームが勢いよく飛び出し、二人にかかる。
まりさ「ふえええええ・・・・」

零士「だから言ったろうに・・・・」
すると玄関からベルが鳴り出した。
『ピンポーン♪』
零士「あ、母さんだ」
まりさ「ここはあたしが片付けておくよぉ・・・・」
玄関を開けると、そこには大荷物を持ったゆっくり胴付き文がいた。
文「お久しぶりです！」
零士「母さん・・・・ こっちこそ。」
文「ところで何でクリームまみれに？」
零士「まあいろいろ・・・・」
母さんを家にあげると、まだ片付けをしていたまりさがいた。
文「あらぁ～♪ずいぶん可愛くなりましたねぇ～♪」
まりさ「あ、零士兄のお母さん！」
零士「まりさ、手伝うぞ？」
まりさ「あ、ありがと♪」
それから同じような手順でアレを作り、母さんに出した。
文「おぉ～♪久しぶりに食べたかったんですよ～♪」
零士「俺にとっちゃ気味悪いけどな」
まりさ「でも美味しいじゃん！」
というか何でこう女って打ち解けるの早いんだろ・・・？
文「ところでまりさちゃん、最近零士とはどう？」
まりさ「あっ、すごく優しいです！」
文「今ではどんな関係に!?」
まりさ「えへへへぇ～♪それはですねぇ～♪」
零士「止めろ、変な誤解されるから」
しかし俺は気になった。あの大荷物は何なのか。
零士「なぁ母さん、あの大荷物何？」
文「あ～、あれはですねぇ、零士がいろいろと困らないようにって持って来たんですよ」
まりさ「あれ全部!?」

文「ええ。そうですよ♪」
零士「いくらなんでも多すぎだろ・・・・」
文「備えあれば憂いなし！です！」
零士・まりさ（いくらなんでも備えすぎ・・・・）
母親の心配性にほとほと困り果てる二人だった。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・

第四話　仕事仲間

ー朝が来る。
何か重いなぁ・・・・。
零士「う～ん、もう朝か・・・・ ってん？」
まりさ「あっ、零士兄起きた？」
まりさは俺の上に跨がっていた。
まりさ「おはよう零士兄！ごはんできてるよ！」
零士「ああ、おはよう。」
まりさ「ところでさ・・・・」
零士「何だ？」
まりさは顔を赤らめながら俺に問う。
まりさ「さっきから硬いの当たってるんだけど・・・ 何これ？」
零士「!?!?」
俺はさすがに慌てた。
なんとか弁解しようとする。
零士「い、いやこれはその～、なんだ、一種の反応みたいなその～」
まりさ「それにしても苦しそうだよ？」
まりさが触ろうとした瞬間、俺は次の行動を取った。
零士「やめぇぇぇぇぃ!!」
まりさ「ゆわっ!?」
俺はまりさの腰をつかみ、横に投げ飛ばした。
まりさ「イダッ!!」
零士「あっ、すまない、つい・・・・」
まりさ「もぉ～、零士兄気をつけてよぉ！」
今日も1日が始まる。

第四話　仕事仲間
零士「今日の朝飯はトーストか。」
まりさ「うんっ！時間がないと思ったから！」
俺はまりさの用意したトーストを頬張り、朝のニュースを見る。

アナウンサー『最近、この町近辺で胴付きゆっくりが惨殺される事件が発生しています。胴付きゆっくりを飼っている方は十分お気をつけ下さい。』
まりさ「朝から物騒だね～」
零士「飼いゆっくりとはいえ既に家族みたいなもんだからなぁ」
まりさ「えっ!?あたしの事そんな風に思ってくれてたの!?」
零士「まあな。」
まりさ「嬉しいなぁ～♪」
まりさの事は確かに心配だ。
だからといって過保護にする訳でもない。
零士（俺はお前を信頼してるんだ・・・・ まりさ）
まりさ「ゆ?零士兄何か言った?」
零士「ん、いや、何でもない。」
ふと時計を確認すると、１０時を回っていた。
零士「あ!?しまった!!」
まりさ「あ、もしかして時間?」
零士「すまない!俺の鞄持ってきてくれ!」
まりさ「うんっ!わかったよ!」
その後、まりさに見送られ、バタバタと家を出た。

ー加工所
零士「はぁ・・・・ 何てこった・・・・」
?「珍しいじゃねぇか?お前が遅刻なんてよ」
零士の背後から話しかけてきたのは零士の仕事仲間であり友人でもある人物だった。
零士「またお前かよ、雄吾」
雄吾「だってよ、お前めったに遅刻しないじゃん?5分前行動をモットーとしてんのにさ。」
零士「うるさいなぁ」
雄吾は俺と同じくハーフである。
人間とゆっくり胴付きてんこが親である。

なのでてんこの性質を受け継ぎ、幾分頑丈である。
雄吾「解説ご苦労さん！」
零士「誰に言ってんのかわかってんのか？」
雄吾には少しばかり困らされている。
何故必要以上に俺に絡んでくるのかイマイチ理解できなかった。
零士「あっ、そういえばコッチャさんからまだ新しい駆除用道具もらってないな」
雄吾「んなもんいらねぇだろ？」
零士「素手でやったら効率悪いんだよ」
雄吾「そうなのか？」
……　あ、こいつ馬鹿だ。
そう俺は思ってしまった。
ちなみにコッチャさんっていうのは胴付きさなえである。
いつもコッチャさんの造る武装はかなり役に立っている。
さなえ「零士く～ん？新しい駆除用道具いらないの～？」
零士「すいません今行きます」

仕事終わり
雄吾「なぁ零士、後で飲みにいかねぇか？」
零士「悪い、すぐ帰ってやらないとまりさが心配するから」
雄吾「じゃあお前ん家で♪」
零士「帰れ」
雄吾「何でだよぉ!?」
雄吾は面白い奴だ。
ちょっとからかってやれば期待通りの反応をしてくれる。
零士「ははっ、冗談だよ」
雄吾「お前なぁ…　友達いないだろ？」
零士「お前以外いないな」
自宅
『ガチャリ』
零士「ただいま」

するといつものように奥からぱたぱたとまりさが出迎えてくれた。
まりさ「零士兄！おかえり！ってあれ？」
雄吾「おいっス。久しぶりに来たぜ」
零士「こいつがどうしてもっていうもんだからさぁ」
雄吾「俺そんな事いつ言ったよ!?」
俺は酒は飲めるがそんなに飲まない方だ。
逆に雄吾はかなり飲む方で、一升瓶３本飲んでも酔わない。
零士「お前どんな肝臓してんだ」
雄吾「そんなに変か？」
まりさ「かなりアルコールが入ってるはずだよ？」
雄吾「んなもん平気だって！全然酔わねぇし。」
それが心配なんだが。
その後、計一升瓶４本を飲みきった。
雄吾「んじゃ、また今度来るわ」
零士「二度と来んな」
まりさ「またねぇ～♪」
明日はどんな１日が始まるのだろうか・・・
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・

第五話　エンカウンター

……　今日は朝から電話が鳴り響く。
第五話　エンカウンター
まりさ「零士兄～！電話～！」
零士「わかった、今行く」
俺は電話が置いてあるリビングに向かった。
『カチャッ』
零士「もしもし？」
ハクレイ『やっと出てくれたわね、零士君』
電話の相手は意外な人物だった。
零士「は、ハクレイさん!?どうしたんですか？」
ハクレイ『話は加工所でするわ。とにかくまりさも連れて来なさい、いいわね？』
零士「えっ、ちょっ、ちょっと待ってくださいよ!?」
電話は一方的に向こうから切られた。
『プツッ、ツー、ツー、ツー、ツー』
零士「いったい何があったんだ……？」
まりさ「零士兄？どうしたの？」
零士「まりさ、今日は俺と一緒に来い。いいな？」
まりさ「わかったよ」
そうして俺達は加工所に向かった。
ー加工所
零士「で、ハクレイさん、いったい何があったんです？」
ハクレイ「ディクテイターを用意して。それから……」
ハクレイさんは俺にある駆除用道具を渡した。
零士「何ですか、この銃」
ハクレイ「コチヤの新発明品よ。名称は《ゆっくり駆除用連装砲ケルベロス》よ」
零士「まるでガトリングですね……」
まりさ「重そうな道具だね……」

どうやらこの銃、アタッシュケースにしまえるらしい。
零士「意外とコンパクトですね」
ハクレイ「使用用途はあなたに任せるわ。それとまりさ」
まりさ「ひゃいっ!?」
ハクレイ「零士君から離れないように行動して頂戴。」
零士「どこかに行くんですか？」
ハクレイ「ええ……」
『現場よ……』
その言葉が頭から離れなかった。
ーY地区物置小屋前
小屋の前で無惨に殺されかけた胴付きルーミアが放置されていた。
零士「マジかよ…… ここまでやるか普通？」
ハクレイ「ここまでやるのが犯人の特徴よ」
胴付きルーミアの身体は腕は千切れ、脚は潰され、目には光がなかった。
ルーミア「う…… あ……」
まりさ「っ!?ウプッ」
零士「大丈夫か？まりさ」
ハクレイ「やはり見せない方がよかったかしら」
まりさは吐きそうになったが、我慢した。
零士「あの、証拠はあります？」
ハクレイ「ええ。監視カメラに記録されているわ。これから奴のコードネームは《ジェノサイド》とするわ」
まりさ「は、早くルーミアを助けた方が……」
零士「そうだな。おい、動けそうか？」
ルーミア「う…… 無理…… かも」
ハクレイ「出餡がひどくならないうちに運んで頂戴！」
零士「了解！」
ーゆっくり病院
ルーミア「…… あれ…… ？私、生きてる？」

零士「目、覚めたみたいだな」
ルーミア「ひっ・・・」
恐らくルーミアは俺を怖がっているようだ。
零士「心配するな、俺はお前の味方だ」
ルーミア「本当？」
零士「ああ。」
すると部屋に飛び込んで来たのはまりさだった。
さらにまりさはルーミアに抱きつく。
まりさ「うわあぁぁぁぁぁん!!ルーミアぢゃぁぁん！」
雄吾「おっ、意外と大丈夫そうだな」
零士「雄吾、お前あれほどまりさを・・・」
雄吾「いいじゃん助かってるってわかったんだし」
いきなりの出来事により少し困惑するルーミア。
ルーミア「まり・・・ さ？」
まりさ「よかった、本当によかったよぉぉぉ!!」
零士「ルーミア、まりさはずっとお前の事を心配していたんだよ」
まりさは大粒の涙を流し、ルーミアの服を濡らしていた。
それほど心配したんだろう。
ルーミア「・・・・ そっか。ありがとう、まりさ」
まりさ「うんっ！」
雄吾「さて！そいじゃあこんな事が二度とないようにさっさと犯人とっちめるか！」
零士「そうだな。あれだけまりさを泣かせたんだ、一発ぶん殴ってやらんと気が済まん」
俺は固く拳を握りしめていた。
その後すぐにハクレイさんに電話をした。
ハクレイ『どうしたのかしら？零士君の方から電話を寄越すなんて』
零士「ハクレイさん・・・ 今回の事件、俺・・ いや、俺達にやらせてくれませんか？」
ハクレイ『なるほどね、良いわ。私も相当ムシャクシャしてたから

私の分もお願い』
零士「了解・・・・ しました」
俺は絶対に《ジェノサイド》を許すつもりはない。
必ずまりさを泣かせた事を後悔させてやる。
ー夜、自宅にて
俺が眠りに就こうとした時にまりさがドアをノックしてきた。
零士「どうしたまりさ？」
まりさ「零士兄、あのね？」
零士「なんだ」
まりさ「今日は一緒に寝て欲しいの・・・・ ダメ？」
やはりまりさは今日の出来事が恐ろし過ぎたのであろう。
だから1人だと不安になる訳か。
零士「いいぞ、どうせ隣で寝たいんだろ？」
まりさ「いいの？」
零士「構わん。俺がどうこう言う問題じゃないからな」
まりさ「ありがと、零士兄」
まりさは俺のベットに潜る。
零士「そういえばルーミア、よかったな。雄吾に引き取られてさ」
まりさ「うん」
零士「これからは毎日会えるな、まりさ」
まりさ「そうだね。零士兄」
零士「もうお前を悲しませたりしない。絶対だ」
まりさ「本当？ありがと零士兄」
零士「家族として当たり前だ」
まりさ「そうだね。じゃあそろそろ寝るね？零士兄」
零士「ああ。おやすみ。まりさ」
まりさ「おやすみなさい、零士兄・・・・」
こうして1日が終わる。
明日は・・・・ 奴を後悔させる！
Ｔｏ ｂｅ ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・

番外編　雄吾とルーミア

番外編　雄吾とルーミア

『カチャッ』

雄吾「ただいま～、っても1人だけど」

ルーミア「お邪魔します・・・・」

雄吾はルーミアを連れ、自宅に招いた。

雄吾はあの事件以来ルーミアを引き取る事にしたのだ。

雄吾「さ、今日からここがお前の家だぞ～♪」

ルーミア「ホントにいいの？」

雄吾「気にすんなって♪」

どうやらルーミアの奴、どうも落ち着かないみたいだな。

雄吾「さて、これからどうすっかな～」

ルーミア「あの、お兄さん」

雄吾「ん？どした？」

ルーミアは雄吾の服の袖を引っ張る。

やっぱり緊張してんだなぁ～。

ルーミア「これからお兄さんの事、何て呼べばいいの？」

雄吾「どんな風に呼んでもらっても構わないぞ～♪」

ルーミア「じ、じゃあ・・・・」

ルーミアはもじもじしながら答える。

ルーミア「雄吾お兄様・・・・・じゃダメ？」

雄吾「おいおい・・・・・雄吾お兄様って・・・・・照れるなぁ♪」

雄吾はまんざらでもない様子だ。

すると、誰かの腹の虫が鳴る。

『ぐぅぅぅぅ・・・・・』

雄吾「なんだ、ルーミア腹減ったのか？」

ルーミア「う、うん」

どうやらルーミアだったようだ。

雄吾（しっかし俺ぁ胴付きなんて飼った事ねぇぞ・・・？何食うかわっかんねぇし・・・・後で零士に聞いてみっか）

ルーミア「雄吾お兄様？どうしたの？」
雄吾「ん？あぁ、ちょっと考え事してた」
ルーミア本人に聞いてみた方が手っ取り早いんじゃないか？
早速聞いてみる。
雄吾「なあルーミア、何か食べるか？何がいい？」
ルーミア「う～ん、じゃあ実ゆっくり食べたいな」
実ゆっくりか・・・・・ あ、そういえば。
雄吾「たしかこないだ捕まえたれいむとまりさのつがいがまだ生きてたはず・・・・・」
ルーミア「？」
ルーミアと一緒にキッチンに向かうと、ガラスケースに入れられたゲスれいむ・まりさのつがいと、子ゆっくりが騒いでいた。
れいむ「ゆっ！やっときたねくそにんげん！」
まりさ「どれいのくせにおそすぎるんだぜ！」
れいみゅ「れいみゅにはやきゅあみゃあみゃちょうらいにぇ！」
軽くイラッときた。
こいつらの言動が寿命縮めるってのになぁ・・・・・
雄吾「やれやれ・・・・ 相変わらずのゲスっぷりだな・・・・」
ルーミア「わぁぁぁぁ♪こんなにいたの!?」
雄吾「喜んでくれて嬉しいよ♪さて、どうしたもんかなぁ」
まりしゃがやっぱり挑発してくる。
あえてスルーするが。
まりしゃ「くしょにんげんはやきゅあみゃあみゃよこしぇ！でないとぷきゅーしゅるのじぇ!?」
れいみゅ「れいみゅにもはやきゅあみゃあみゃちょうらいにぇ!!」
少し考え事をしてからどうするか考える。
雄吾「う～む、ルーミア、お前はどんな風に食いたい？」
ルーミア「じゃあねぇ、実ゆっくりはそのままで、子ゆっくりは焼いて食べよ？」
雄吾「んじゃそうするか」
子ゆっくりを掴み、おかざりを取り上げる。

れいみゅ「ゆっ！れいみゅによおきゃじゃりきゃえしえええ!!」
まりしゃ「まりしゃしゃまのおぼうちかえしゅによじえええ!!」
雄吾（うるせぇ・・・・）
ルーミア「ねぇ、雄吾お兄様？このれいむとまりさはどうする？」
実ゆっくりを作るなられいむとまりさで《すっきりー》をさせる必要がある。
雄吾「そいつらはルーミアに任せるわ」
ルーミア「任せて雄吾お兄様♪」
さて、次は邪魔なおさげをもぎ取る必要がある。
という訳で早速もぎ取る。
『ブチッ、ブチブチッ!!』
れいみゅ「ゆんやあぁぁぁぁ!!れいみゅによぷりちぃにゃおしゃげしゃんぎゃあああ!!!」
まりしゃ「ゆぎぃぃぃぃぃ!!!まりしゃのおしゃげしゃんいぢゃいぃぃぃぃ!!!!」
れいむ「おちびちゃぁぁぁぁん!!!」
よっしゃあんよ焼きすっか。
あんよ焼きはゆっくりの移動手段を封じる効果的な虐待方法である。
雄吾「え～と、ライターどこやったっけ？」
ルーミア「ライターなら小物入れに入ってるよ？」
雄吾「お、サンキュー♪」
では早速あんよ焼きやってみよう。
『ジュウウウウッ!!』
雄吾「なんか香ばしい匂いが・・・・」
ルーミア「それもそうだよ、だって饅頭だし」
あまり焦がさないようにしなきゃな。
まあ、子ゆっくりの叫びなんてどこ吹く風。
れいみゅ「ゆぎゃあああ!!あんよしゃんあぢゅいぃぃぃ!!」
まりしゃ「めらめらしゃんもうやめるのじぇぇぇ!!」
なんか見てて面白いな、こいつら。

千切れた元おさげをぴこぴこしてるし。
雄吾「そろそろか？」
いい感じに焼けたな。
まあれいみゅとまりしゃともども息絶え絶えだけど。
れいみゅ「ゆ・・・・ ゆひぃ・・・ なんでれいみゅぎゃきょんなめに・・・・ りふっじんじゃよ・・・・」
まりしゃ「ゆひぃ・・・ ゆひぃ・・・ まりしゃしゃまはちゅよいのに・・・・ なんできょんなきょとに・・・・」
後はまんべんなく焼けばいいみたいだな。
死なれちゃ困るからオレンジジュースでも掛けとくか。
れいみゅ・まりしゃ「ゆびっ!!?」
仕上げにフライパンで焼けば大丈夫だな。
『ジリジリジリジリジリッ!!』
れいみゅ「ゆんやあぁぁぁぁ!!じめんしゃんあぢゅいぃぃぃぃ!!もうやぢゃあぁぁぁ!!!」
まりしゃ「じめんしゃんやめるのじぇぇぇぇ!!ぷきゅーしゅるのじぇぇぇ!!」
むぅ、なかなか香ばしい匂いが・・・・ 饅頭だからそりゃそうか。
雄吾「あっ」
まりしゃ「ゆ”っゆ”っゆ”っ・・・・」
やっちまった・・・・ まりしゃが非ゆっくり症になっちまった・・・・
まぁいっか。れいみゅは大丈夫そうだし。
ルーミア「雄吾お兄様！実ゆっくりができたよ！」
雄吾「お、ナイスタイミング！」
ルーミア「そっちもできたみたいだね♪」
れいみゅ「ゆんやあぁぁぁぁ！れいみゅのいもーちょおおおおお!!」
まりしゃ「ゆ”っゆ”っゆ”っゆ”っゆ”っゆ”っゆ”っ」
れいむの額に茎が伸びており、茎に5匹ほどの実ゆっくりができていた。

れいむ「ゆわあぁぁぁ！おちびちゃんゆっくりしてるよ！」
まりさ「ゆっくりそだつのぜぇぇぇ！」
俺とルーミアで食事の準備を済ませ、調理したれいみゅとまりしゃを持ってくる。
れいみゅ「ゆ・・・・ もっちょゆっくりちたい・・・・」
まりしゃ「ゆ”っゆ”っゆ”っゆ”っゆ”っゆ”っゆ”っ」
そして、作った実ゆっくりをもぎ取り、食卓に運ぶ。
途中、れいむの嘆く声が聞こえたがあまり気にしないでおく。
雄吾「そいじゃ、いただきますか！」
ルーミア「もうお腹ペコペコだよぉ～」
雄吾「んじゃいただきます」
食事中、ルーミアの野良時代について聞き、泣くかと思った。
今のように生活が豊かではないこと。
目の前で仲間が殺されたり、連れ去られたりしたこと。
そして、俺に対して感謝の気持ちが伝えきれないほどあること。
雄吾「はぁ、ごちそうさん」
ルーミア「もう食べきったの？早いね♪」
雄吾「ん？そうか？」
しっかし、いい体つきしてんなぁ～。
零士んとこのまりさには劣るがな。
ルーミア「あ～、美味しかった♪ごちそうさま！」
雄吾「飯食ったら風呂入っちまえよ～」
ルーミア「うん。わかったよ」
皿洗いをしている時でもあの実ゆっくりの甘さがまだ残っている。
やめときゃよかったなぁ、あれ食うの。
ルーミア「ねぇ雄吾お兄様～、石鹸どこ？」
雄吾「ん？どぅわぁ!?」
何があったかっていうと、ルーミアがタオル1枚で近づいていたから驚いたんだよな。
雄吾「あっ！いや、ちょっと待っててくれ！」
ルーミア「どうしたの？雄吾お兄様？」

雄吾「だっ、大丈夫だから！」
夜。
雄吾「ふわぁぁぁ・・・ なんか今日は疲れた・・・・」
ルーミア「雄吾お兄様！一緒に寝てもいい？」
寝間着を着たルーミアもこれはこれで可愛い。
雄吾「あー、いいぞ、俺寝相悪いけど」
ルーミア「大丈夫！雄吾お兄様なら許せるから！」
雄吾「ホントかよ・・・・」
二人してベッドに寝る。
雄吾（なんかルーミア、いい匂いすんな・・・・ ゆっくりだからか？）
ルーミア「雄吾お兄様、くすぐったいよ」
雄吾「あ、わりぃな。嫌だったよな」
ルーミア「ううん。そんな事ないよ雄吾お兄様♪」
零士の苦労が少しわかった気がするぜ・・・・・。
雄吾「じゃ、おやすみルーミア。また明日な」
ルーミア「おやすみなさい、雄吾お兄様・・・・」
Ｔｏ ｂｅ ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・

第六話　ぶっ飛ばす！

第六話　ぶっ飛ばす！
事件発生から2日。
俺達はいまだにジェノサイドの足取りを掴めていない状況だった。
零士「クソッ！このままだとまた被害が・・・・」
まりさ「零士兄・・・・」
雄吾「ま、アイツから尻尾出さない限り無理だなこりゃ」
すると休憩室にハクレイさんが入ってきた。
ハクレイ「私がここに来た意味。分かってるわね？」
零士「という事はまさか！」
雄吾「やっと尻尾出したって訳か！」
ハクレイ「ええ。警備員がたまたま見つけたのよ」
これで奴をぶっ飛ばせる！
俺はすぐさま居場所を聞いた。
ハクレイ「N地区倉庫前にいるはずよ。いい零士君？」
零士「はい？」
ハクレイ「必ずアイツを懲らしめて頂戴。わかったわね？」
零士「やってやりますとも！」
雄吾「ルーミアの受けた傷の分も返さないとな」
俺達は奴の居場所に向かった。

ーN地区倉庫前
ジェノサイド「ギヒヒ、やっぱ虐待するのは胴付きに限るよなぁぁぁ・・・」
ジェノサイドが次の獲物に定めたのは、胴付きフランだった。
フラン「い、いやっ、こないで！こないでぇぇぇぇ！」
ジェノサイド「ヒャッハァァァァ！胴付きは虐t『やらせるか!!』フグゥッ!?」
零士はジェノサイドの腹に蹴りを入れる。
蹴りをくらったジェノサイドは大きくのけぞる。

雄吾「今のうちに逃げな!!」
フラン「あ、ありがと」（バサァッ）
ジェノサイドは獲物の胴付きフランを虐待できずに苛立っているようだ。
ジェノサイド「テ、テメェ！俺様の至高の時間を邪魔しやがって!!」
零士「なんだと・・・・？」
雄吾「人として腐ってやがる・・・・！」
俺はジリジリと奴との距離を縮める。
そして。
『バキッ！』
ジェノサイド「グアッ！」
零士「・・・・・・じゃない」
ジェノサイド「あ？」
俺はさらに奴を殴る。
零士「今まで殺された奴らの痛みはこんなもんじゃない!!」
『ドゴッ！』
ジェノサイド「ひぎゃっ！」
俺は奴を許す事ができない。
あれだけ殺しておいてまだ殺す、そういう考えが実に不愉快だったからだ。
零士「うおおおおあああ!!!!」
『ドガァッ！』
ジェノサイド「ギャアアッ！」
雄吾「おい零士！やり過ぎだ！」
ふと我に返った俺は自分のやった事を改めて認識した。
・・・・・・しまった。
ジェノサイド「ひ・・・・・ひぎぃ・・・・・」
雄吾「そろそろ警察が来る！マズイぞ！」
その後、俺達は警察に事情聴取され、一時的に警察署に向かった。
ジェノサイドも捕まったようだ。
後はよく知らない。

事情聴取が終わった後、玄関前まで歩いていくとまりさが職員に弁解していたようだった。
まりさ「お願いします!!零士兄を出してあげて下さい!!零士兄は・・・ 零士兄は本当はやりたくてやった訳じゃなくて!」
職員「でもねぇ、お宅のお兄さん、傷害罪に問われかけてるんだよ?」
まりさ「それでも!それでも零士兄は悪くないんです!」
なるほど。まりさはずっと俺の事を心配していたんだな。
零士「もう大丈夫だ、大丈夫だから帰るぞ。まりさ」
まりさ「っ!・・・・ 零士兄ぃぃぃ!!」
まりさは俺におもいっきり抱きついてきた。
よほど心配したんだろう。
まりさはずっと泣き続けた。多分今まで堪えてた物が吹っ切れたんだろうな。
職員「羨ましいねぇ。うちのゆっくりもそんな風に甘えてくれればいいのになぁ」
零士「あ、すいません。迷惑でしたよね?」
職員「いやいや。それよりも大事にしてあげて下さいね?その子は君の事が大好きみたいだから」
零士「はい。そうしますよ。さ、帰るぞ」
まりさ「うんっ!早く帰ろ♪」
こうして今回の事件は幕を閉じた。
奴がこの後どうなろうと俺達は知らない。
ルーミアもやっと安息の日々を送れそうだ。
零士「なぁまりさ」
まりさ「なぁに?零士兄」
零士「今晩の飯、何が食いたい?」
まりさ「え~とねぇ、じゃあ零士兄の特製ハンバーグがいいな!」
零士「んじゃそうするか。早く帰って食いたいだろ?」
まりさ「いつもありがとう♪零士兄!」
俺は多分、この時見たまりさの笑顔を忘れないだろう。

零士「あぁ。こっちこそありがとうな」
雄吾「おーい！零士～！」
ルーミア「まりさ～！」
零士「げ、雄吾」
まりさ「あっ、ルーミアちゃん！」
後ろから追い付いたらしい。
雄吾「どうだ？今日は飲まねぇか？」
零士「そうだな。今日は気分がいい」
雄吾「へぇ～そうかそうか・・・・・ってえ!?」
零士「どうした？」
雄吾「いや、珍しいな～って」
まりさ「早く帰ろうよぉ～！」
零士「あぁ。悪い悪い。じゃあ行くか」
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・

登場人物紹介

ある男と胴付きまりさの話

登場人物紹介。

1、不知火　零士《しらぬい　れいじ》

年齢２０歳。

人間とゆっくり文のハーフ。

ゆっくり文の遺伝子を受け継ぎ、現時点で３つの能力が使える。

①、聴覚が鋭いため、遠い場所の音が聞こえる。

②、傷の再生速度が速い。

③、ゆっくり文の遺伝子を受け継いでいるため数十秒だけ空に浮ける。

加工所の職員。さらに胴付きまりさと同居している。

2、まりさ（胴付き）

零士に保護されたゆっくり。

保護された後、零士と同居すると『零士兄』と親しみを込めて呼んでいる。

同族であるゆっくりを殺す事にはためらいはないようだ。

3、ハクレイ（胴付きれいむ）

加工所で働いている胴付きれいむ。

プラチナバッチを保持しているゆっくり虐待の天才。

零士を加工所に誘ったのもハクレイである。

4、コチヤ（胴付きさなえ）

同じく加工所で働いている胴付きさなえ。

主に零士達の使うゆっくり駆除用道具を開発するプラチナバッチ保持者。

コッチャさんと呼ばれている事に少々不満があるようだ。

5、黒鉄　雄吾《くろがね　ゆうご》

年齢２０歳。

彼も零士と同じく人間とゆっくり天子のハーフである。

彼の現時点で使える能力は

①、身体硬質化（全身）
②、部分的に身体硬質化させ、打撃力を上げる
③、ある程度の重さのある石を浮かせる事が可能。
以上の３つがある。
ジェノサイド事件以来、ルーミアを引き取り、一緒に暮らしている。
６、ルーミア（胴付き）
ジェノサイド事件時に救出されたゆっくり。
雄吾の事を感謝の意も込めて『雄吾お兄様』と呼んでいる。
ちなみにゆっくりルーミアは希少種＋捕食種である。
７、モブゆっくり（でいぶとかまりさとかれいみゅなど）
いつもそこら辺に暮らしているゆっくり。
野生と野良がいるが、大して知能は変わらない。
俗に言う『餡子脳』である。
ーここからネタバレ注意！
８、霧島　明日香　《きりしま　あすか》
年齢２０歳。
彼女は人間とゆっくりレイセンのクォーター。
４分の３が人間、残りがゆっくりという極めて稀なケースである。
そのため、使える能力は
『３メートル以上の跳躍力が使える』
１つだけになっている。
零士の幼馴染みであり、零士は『おてんば娘』と思って世話をやいているらしい。
９、ようむ（胴付き）
明日香の同居人ならぬ同居ゆっくりである。
ゆっくりにのみ有効な刀《楼観剣》を手足のように操る金バッチ保持者。
明日香が度々起こす事件にいつも苦労している。
１０、霧島　龍次　《きりしま　りゅうじ》

年齢２５歳。
明日香の兄であり、隔世遺伝によりゆっくり美鈴の血・・・・いや餡子を受け継いでいる人物。
普段何を考えているかわかりづらい人物でもあり、しかし妹の明日香を心配している。
口癖は『僕は断じてシスコンではない！』
１１、れみりあ（胴付き）・ふらん（胴付き）
龍次と共に行動している姉妹。
れみりあは度々暴走するふらんのブレーキ役。
ふらんは何にでも興味を示すお兄ちゃんっ子。
度々龍次と同時にふらんにツッコミを入れる事も。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・

第七話　おてんば娘

第七話　おてんば娘
？「フフッ・・・・　やっと帰ってきたわ！私の故郷！」
？「あの～・・・　明日香・・・・」
明日香「なぁに？ようむどうかした？」
ようむ「こういう所では慎んでくださいよ・・・」
明日香「あっ・・・・」
どうやら明日香は駅で騒いでいたようだ。
まぁ俺にとっちゃ知ったこっちゃねぇけど。
自宅にて。
今日はハクレイさんに休みをもらった。
だから少し暇である。
零士「Ｚｚｚ・・・・　Ｚｚｚ・・・・」
まりさ「零士兄ぃぃぃ!!起きてぇぇぇ!!」
零士「!?!?!?」
チクショウ・・・・　至近距離で起こしやがって・・・・・。
まぁいいや。そろそろ起きようかと思ってたし。
まりさ「おはよう零士兄！」
零士「あぁ。おはようまりさ」
今日はなんか嫌な予感がするなぁ・・・
とりあえず気にしないでおく。
まりさ「ねぇ零士兄？」
零士「どうした？」
まりさ「今日の朝ごはんはどうする？」
零士「まりさに任せるよ」
まりさ「わかった！」
まりさはそう言ってキッチンに向かった。
俺は自室で待機する。
・・・・　しばらくして窓ガラスが割れる音がした。
『ガシャーンッ！』

零士「うおっ!?何だ!?」
まりさ「たいへんだよ零士兄!また野良ゆっくりが!」
零士「またかよ・・・」
俺はいつも持ち歩いているゆっくり駆除用単発式銃《ディクテイター》を構える。
俺達がリビングに向かうと、だいぶ荒らされてた。
零士「ほぉ～。ぱちゅりーとありすのつがいか」
まりさ「そんな事言ってる場合じゃないよぉ!」
零士「あ、悪い悪い。すぐ片付けよう」
ん～、見た感じあのありすれいぱーだな。
けどそれでもぱちゅりーとのつがいは珍しい。
ぱちゅりー「むきゃきゃきゃきゃ!!ありすここがぱちぇたちのあたらしいおうちよ!!」
ありす「んっほぉぉぉぉ!!!!かわいいまりさねぇぇぇぇ!!わたしがあいしてあげるわぁぁぁぁ!!」
あっ、こいつら相当ヤベェ。
それにまりさも顔がひきつってる。
ぱちゅりー・ありす「ここをわたしたちのおうちにs『ちょっと待て』むきゅ?」
零士「ちょっと待てよ」
ぱちゅりー「むきゅ、もりのけんじゃのぱちぇになにかようかしら?」
おいおい・・・・ それを言うなら『森の賢者（笑）』だろ。
ぱちゅりー「ぱちぇたちはいますっごくいそがしいの。あとにして」
そう言ってぱちゅりーは帽子の中から子ゆっくり2匹を出した。
ぱちゅ「ゆっ!ちょってもゆっくちできるおうちだわ!」
ありしゅ「ゆゆーん!あみゃあみゃたべちゃい!」
チッ、あまりやりたくなかったが仕方ない。
俺はディクテイターの引き金を引いた。
ありしゅ「ゆっくちちていっ『パァンッ!』ぺぽっ!?」

ぱちゅりー「むきゅうぅぅぅ!?おちびちゃん!?」
ありす「はやくそこにいるまりさをさしだしてね！すぐでいいよ！」
零士「やなこった。」
俺はさらに引き金を引く。
ありしゅ「も、もっちょゆっくぢぢだが『パパァン！』ゆぎっ!!」
ぱちゅ「うぷっ、えれえれえれえれ・・・」
ぱちゅりー「ど、どぼじでごんなごどでぎるのぉぉ!?」
ありす「と、とかいはじゃないわ！はやく・・・」
零士「逃がすか」
ふと俺は思い出した。
そういえばハクレイさんからアレもらったんだっけ。
すると玄関からベルが鳴る。
『ピンポーン♪』
零士「なんだよ今いいとこなのに・・・」
俺はそそくさと玄関に向かった。
零士「はいどなたですかぁ？」
明日香「私よ零士♪」
零士「誰だお前？」
明日香「覚えてないの!?」
零士「あぁ。全然」
すると横からようむが出てきた。
ようむ「あの、零士さん、これなら覚えてますよね？」
零士「あっ、明日香とようむか。久しぶｒ」
明日香「遅い!!」
で、お互いの近況を報告しあい、今の状況も説明した。
明日香「え～、こいつらだったら普通に潰せばいいじゃん？」『ブチュッ』ぱちゅ「ゆべっ！」
零士「そう言ってナチュラルに潰せるお前がすごいよ」
明日香「あっ、そうだ！ようむ、こいつらをあなたの楼観剣のサビにしてやりなよ♪」

ようむ「あ、はい。そうします。だいぶイライラしてたので良いストレス発散です」
ようむが腰に差している刀《楼観剣》を抜き、ぱちゅりー達に向けて構える。
ようむ「では参ります！」
ようむは僅か１０秒で片をつけた。
ぱちゅりーは十文字切りで。
ありすには細切れに。
零士「なぁ明日香？」
明日香「どうしたの？零士」
零士「ようむさ、すごく強くなってないか？」
明日香「そう？あ、そうそう」
零士「なんだよ」
明日香から出た言葉はかなり強烈な物だった。
明日香「今日からお隣だから～♪よろしくね♪」
零士「は？」
明日香「だから、今日からお隣だって言ってんの♪」
まりさ「え、ホント!?わぁいまた友達増えたぁ♪」
零士「・・・・。」
まりさ「どうしたの？零士兄？」
零士「嘘だぁぁぁぁぁ!!!!!」
ようむ「零士さん・・・・お気の毒に・・・・」
これから俺はどうなってしまうんだ・・・・・。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・

第八話　それぞれの日常

第八話　それぞれの日常
零士・まりさｓｉｄｅ
早朝。
零士「ふあぁぁぁぁ・・・・　良く寝たなぁ・・・・」
まりさ「すぅ・・・・　すぅ・・・・」
零士「まだ寝てるみたいだな・・・・　よし、銃のメンテするか」
俺はディクテイターとケルベロスのメンテを始める。
メンテで特に大変なのがケルベロスの砲身だ。
午前７時。
零士「お、もうこんな時間か。朝飯の準備しなきゃな」
まりさ「うむぅ・・・・　おはよう零士兄・・・・」
零士「おはようまりさ。まだ眠いのか？」
まりさ「うん、ちょっとだけ・・・」
零士「今朝飯作ってるから少し待ってろ」
まりさ「目玉焼き食べたい・・・・」
零士「わかったって」
午前７時半。
零士「どうだ？トースト美味いか？」
まりさ「うんっ！すごく美味しい！」
零士「それは良かった」
まりさ「ねぇ零士兄、今日は二人でお散歩しよ？」
零士「別にいいぞ」
公園にて。
零士「いい天気だな今日は」
まりさ「うん、そうだね♪」
零士「こんなに天気がいいと昼寝したｋ『ゆんやぁぁ!!』なんだようっせぇなぁ!!」
ふと俺達は茂みを見てみる。
そこには今にも子ゆっくりが生まれそうなれいむと心配するまり

さがいた。
れいむ「ゆぎぎぎぃ!!うばれるぅぅぅ!!」
まりさ「がんばるのぜれいむぅぅぅ！」
零士「・・・・・。」（ビキッ）
まりさ「・・・・ 汚ならしい」
俺はハクレイさんから教えてもらったあの技が使えると考えた。
零士「よっ、と」（ヒョイッ）
まりさ「それどうするの？」
零士「まー見てろ」
俺は生まれそうな子ゆっくりをまりさ（胴無し）に向けて構えた。
れいむ「ゆぎぃぃぃ!!うまれちゃだめだよぉぉぉ！」
零士「せーっ、のっ!!」
『スパァンッ!!』
れいむの腹を破壊しない程度に叩く。
れいみゅ「ゆぅぅぅぅ！ゆっくちうまれちゃよ！」
まりさ「おちびぃぃぃぃ！」
飛んでったれいみゅはまりさを貫通し、壁にぶつかった後絶命した。
まりさ「ゆべっ!!」
れいみゅ「も、もっちょゆっくぢぢだがっだ・・・・」
そして俺はまりさに向けてドヤ顔をかました。
零士「フッ・・・・」（ドヤァ）
まりさ「零士兄なんか変」
零士「そ、そうか？」
ちなみに先程やった事は《赤ゆ大砲》と呼ばれる虐待方法である。
仕組みは空気大砲と同じ原理でぶっ飛ばす寸法。
零士「さて、スカッとした訳だ。帰るぞ」
まりさ「そうだね♪こっちも見てて面白かったし♪」
零士「んじゃ帰るか」
まりさ「うんっ！」

雄吾・ルーミアｓｉｄｅ
午前７時。
雄吾「ん～、ルーミア、離れてくれ」
ルーミア「嫌だ」
状況としてルーミアが雄吾に抱きついている状態である。
雄吾「頼むルーミア、でないと飯作れないからさ」
ルーミア「むー、仕方ないなぁ。じゃあまた後で抱きついてもいい？」
雄吾「別にいいぞ～♪」
ルーミア「やた♪」
ルーミアはしぶしぶ雄吾から離れ、雄吾についていく。
雄吾「今日は何食べたい？」
ルーミア「じゃあ雄吾お兄様の作る特製パスタ食べたいな♪」
雄吾「わかった。ちょっと待っててな」
俺はテキパキと朝飯の準備を済ませ、ササッと作った。
雄吾「んじゃいただきます！」
ルーミア「いただきまーす♪」
俺はすぐに飯を食い終え、トレーニングを始めた。
雄吾「フッ！フッ！フッ！」（腕立て伏せ中。）
ルーミア「雄吾お兄様ぁ♪お手紙来たよ♪」
雄吾「んじゃ！適当な！とこに！おいといて！くれ！」
ルーミア「はぁい♪」
トレーニングを終えた俺はすぐに手紙を見た。
雄吾「お、久しぶりのボランティアか。いいねぇ♪」
ルーミア「なぁにそれ？」
雄吾「ボランティアっていう人助けだよ。一緒に来るか？」
ルーミア「うんっ！行くー！」

明日香・ようむｓｉｄｅ
午前８時。
明日香「スヤァ・・・」

ようむ「まったく・・・・ ほら明日香、早く起きて下さい！」
明日香「う～ん、あと5分・・・・」
ようむ「つべこべ言わずにさっさと起きる！」
ようむは私の布団をめくり、早く起きるように促してくる。
明日香「うー、さっぶ！」
ようむ「朝ごはんできてますよ！早く食べちゃって下さい！」
明日香「はぁい・・・・・」
ようむはまるで私の母親のように世話をしてくれる。
まあ、私は朝が弱いだけなんだけどね。
明日香「なーんも面白いの入ってないじゃん」
ようむ「仕方ないですよ。最近物騒な事ばかりニュースに挙げるんですから」
明日香「つまんなーいのー」
ようむ「必ずとは言いませんけど少しは世間に視野を広げて下さい！」
明日香「へーい」
ようむ「なんですかその返事！」
明日香「すいませんでしたー（棒）」
午後。
明日香「さて、と、買い物行きましょ？ようむ」
ようむ「あ、はい。わかりました今いきます」
いつも買い物で利用しているスーパーで必要な物を買い揃え、帰ろうとしたところ野良ゆっくりに絡まれた。
明日香「懲りないわねあんたたち・・・・」
でいぶ「おいくそばばぁ！でいぶたちはいますっごくおなかがぺーこぺーこなんだよ！だからいまもってるたべものさんをおいてってね！すぐでいいよ！」
くそ・・・・ ばばぁ!?（イラッ）
明日香「ようむ。」
ようむ「なんでしょ？」
明日香「こいつらみじん切りにしてあげて」

ようむ「はい。わかりました」
ようむは楼観剣を抜き、構える。そして。
でいぶ「はやくたべものさんおいてけっていってr」
ようむ「五月蝿い」『ズバッ!!』
でいぶ「ゆげぇ!?」
ようむ「これで良いですか？」
明日香「お疲れ。じゃ、さっさと帰りましょ♪」
ようむ「そうですね♪」

皆思い思いの日常を過ごしたのだった。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・

第九話　シスコン兄貴見参!?　前編

第九話　シスコン兄貴見参!?
自宅にて。
零士「ん～、暇だ」
まりさ「そうだねぇ～♪」（ゴロゴロ）
すると玄関のベルが鳴る。
『ピンポーン♪』
零士「あーい、誰ですか？」
明日香「ヤッホー♪零士♪」
ようむ「突然すみません・・・・」
零士「なんだ、明日香とようむか」
どうやら明日香が突然俺ん家行きたいって事になったけどようむが止めようとしたらしいな。
零士「まあいいや。上がれよ」
明日香「ありがと零士♪」
まりさ「あ、ようむ！ゆっくりしていってね♪」
ようむ「どうも、ゆっくりさせていただきます」
すっかり慣れたみたいだな、ここでの生活に。
あれ？そういえば明日香に兄貴がいたはず・・・・？
零士「なあ明日香」
明日香「なぁに零士？」
零士「お前の兄貴・・・・龍さんはどうしたんだ？」
明日香「え、あー、え～と・・・・」
零士「お前まさか・・・・」
『龍さんに何も言わずに引っ越してきたなんていわないよな？』
俺がそう質問すると明日香の顔色が真っ青になった。
零士「やっぱりか・・・・」
明日香「だって龍兄ちゃん心配し過ぎなんだもん！」
零士「それで1人でも大丈夫だって事を証明するために引っ越してきたと」

明日香「そ。だから大丈夫♪」
俺の携帯から着信音が鳴り響く。
『ピリリリッピリリリッ』
俺は携帯を取りだし、応答する。
零士「はいもしもし？」
龍次『おお！零士君か！久しぶりだな！』
零士「へ!?龍さん!?」
明日香「あんの馬鹿兄ちゃん……」
電話の相手は龍次、明日香の兄《霧島　龍次》だった。
零士「龍さん、どうかしたんですか？」
龍次『いやー、零士君とこに明日香いないかい？』
明日香（いないって言って！お願い！）
零士「……いますけど？」
明日香「なんで言っちゃうのさぁ!?」
龍次『そうか。じゃあ明日香と変わってくれないか？』
俺は明日香に携帯を渡し、電話の相手を変えた。
明日香「はいもしもし……」
龍次『明日香、今どこにいる？』
明日香「零士の家だけど？」
龍次『わかった。直接会って話をしたい。そこで待ってろ』
明日香「チェッ、わかったわ。待ってるから」
そう言って電話を切った。
零士「龍さん来るみたいだな？」
明日香「はぁ、あんまり会いたくないなぁ……」
まりさ「もしかして仲が悪いの？」
ようむ「いえ、苦手なんです」
零士「なんでだ？」
明日香「過保護すぎんのよ私の馬鹿兄貴は」
零士「あぁ、なるほど」
俺はすぐにその言葉の意味を理解した。

後編に続く。

To be continued……

第十話　シスコン兄貴見参!?　後編

第十話　シスコン兄貴見参!?　後編
電話してからだいぶ時間が経っただろうか。
しばらくしてからベルが鳴る。
『ピンポーン♪』
零士「はい、あ、どうも龍さん」
龍次「やあ零士君。元気してた？」
零士「はい、おかげさまで」
すると龍さんの後ろから二人の胴付きが出てきた。
れみりあ「ごきげんよう零士」
ふらん「ヤッホー♪零士お兄ちゃん♪」
零士「あ、れみりあにふらんか。久しぶり」
龍さんは明日香の方に向き直り、こう聞いた。
龍次「明日香、戻ってくるつもりはないんだな？」
明日香「ええ。龍次兄さんが何を言ってもね」
龍次「……。」
龍さんは黙る。考え事をしているようだ。
龍次「よしわかった」
明日香「はぁ？」
龍次「いや、明日香の意思を確認したかっただけだよ」
明日香「そうなの？」
龍次「ただし、条件がある」
龍さんが条件としたのは龍さんが明日香の監視役として過ごし、明日香の身の安全を確保するという内容だった。
明日香「ま、まあそれくらいなら……」
龍次「そうか。さて……　ずっと1人で寂しかっただろう!?僕の胸に抱きついてもいいよ～！さぁ！さぁ！」
あ、そういや龍さんって自覚のないシスコンなんだった。
自覚がないから余計タチが悪い。
明日香「それがキモいって言ってんの!!」

『ドゴォッ！』
明日香のハイキックが龍さんの顔面にクリティカルヒットする。
零士「龍さん、そろそろシスコン止めません？」
龍次「何ッ!?違う、それは違うぞ零士君！」
零士「何がですか」
龍次「僕は断じてシスコンではない!!覚えておけ！」
やっぱりか……。
すると横からふらんが抱きついてくる。
ふらん「零士お兄ちゃぁん！」『ボフッ』
零士「グハッ!?」
れみりあ「こらやめなさいふらん！」
ふらん「ねぇねぇ零士お兄ちゃん♪遊ぼ♪」
零士「い、いきなり抱きついてくるなよ……」
まりさ「あ～あ、零士兄大丈夫かな？」
れみりあ「申し訳ないわ…… ふらん」
ふらん「なぁにお姉さま？」
れみりあ「後でお仕置き。わかった？」
ふらん「えぇぇぇ!?」
じ、自業自得だ……。
意識が薄れる中、心配するまりさの声が聞こえた。
それから２０分後。
零士「ハッ！あれ？」
俺はソファーの上で休まされたようだ。
まりさ「あ、零士兄！大丈夫?」
零士「あ、あぁ。大丈夫だ……」
ふらん「えぐっ…… ひぐっ……」
零士「いったいれみりあにどんなお仕置きされたんだ…… ？」
ふらんがれみりあにどんなお仕置きをされたかについては読者の想像に任せる。
零士「頼むからもう泣くなよ……」
まりさ「大変だね、零士兄♪」

ふらん「ん～♪零士お兄ちゃんの手、大好き～♪」

To be continued……

第十一話　まりさ、おつかいに行く。

第十一話　まりさ、おつかいに行く。
零士「う～ん……」
まりさ「零士兄…　大丈夫？」
零士「あー、なんか熱っぽいな…」
どういう訳かどうも身体がだるい。
どうやら風邪ひいたみたいだな……　俺。
まりさ「はい零士兄、体温計持ってきたよ」
零士「あ、あぁ。サンキュまりさ」
という訳で熱を測ってみる。
うわ、３８度９分かよ……　今日は絶対安静だなこりゃ。
零士「あー、クソッ。仕方ないか……」
あ、そういやまだ買い足していない物あったはず…。
零士「仕方ない、買いに行くか……」（ヨロッ）
まりさ「ゆっ！零士兄寝てなきゃダメだよ！」
零士「けど買い足してない物が……」
するとまりさはこう言った。
まりさ「じゃああたしが零士兄の代わりに買い物行く！」
零士「えぇ～……」
確かに任せてもいいだろうけど一番身が危ないのはまりさだ。
といっても止める気ないだろう。
零士「わかった……　じゃあこのメモに書いてある通りの物を買ってくるんだぞ？」
俺が渡したメモには牛乳、玉ねぎ、カレールーを買うようにと書いた物だった。
まりさ「任せて零士兄！あたし頑張るから♪」
零士「あぁ、それとコイツも貸してやる」
俺はまりさに《ゆっくり駆除用単発式銃　ディクテイター》を貸した。
零士「使い方はわかるだろ？お前に何かあった時にコイツを使え。

いいな？」
まりさ「うんっ！わかった♪」
まりさはそう言って準備を始めた。
そして１０分後。
まりさ「じゃあ行ってくるね♪零士兄♪」
零士「あぁ。行ってらっしゃい」
まりさは買い物に出かけて行った。
……　さて寝るか。
まりさｓｉｄｅ
まりさ「零士兄のために頑張るぞ～♪」
あたしはいつも零士兄と一緒に買い物に来るスーパーに零士兄からお願いされた物を買いに行った。
まりさ「え～と、確か牛乳と玉ねぎとカレールーだよね」
あたしはすぐに買い物カゴに商品を入れ、レジに向かった。
店員「おやまりさちゃん？お兄さんはどうしたの？」
まりさ「零士兄は風邪引いちゃってさ、代わりにあたしが買い物しに来たの♪」
店員「まりさちゃんはえらいねぇ。いい奥さんになれるんじゃないかい？」
まりさ「え!?／／／いや、あたしが零士兄のお嫁さんになんて……／／／」
店員「きっとなれるさ！おばさんが保証したげる」
まりさ「あ、ありがと！おばさん！」
そうしてあたしは店を後にした。
まりさ「ふんふんふふ～ん♪早く帰って零士兄に褒めてもらおっと♪」
するとあたしの目の前に野良ゆっくりが出てきた。
れいむ「ゆっ！そこのくそかいどうつき！ちょっとまってね！」
まりさ「？」
れいむ「れいむたちはね、いまとってもおなかがぺーこぺーこなんだよ！だからごはんさんちょうだいね！」

まりさ「そ、そんな事言われてもなぁ～」（汗）
あっ、そういえば零士兄から借りたディクテイターがあったんだった。
という訳でディクテイターを構える。
れいみゅ1「ゆ？なんなによそりぇ？」
れいみゅ2「しょんなこちょしちぇないぢぇはやきゅごはんしゃんちょうらいにぇ！」
れいむ「そうだよ！おちびちゃんたちだっておなかぺーこぺーこなんだよ！はやくちょうだいね！」
あたしは一応警告する。
まりさ「いいれいむ？これは弾があたるとすごく痛いんだよ？だからあたしに引き金を引かせないでね？」
れいむ「いまそんなことかんけいないでしょおぉぉぉ!?れいむがごはんさんちょうだいっていったらすぐに『パンッ！』ゆ？」
れいむが言葉を言い終わる前にあたしはれいみゅを一匹殺した。
れいみゅ1「ゆ・・・ゆげぇ・・もっちょゆっくぢぢだがっだ・・・・」
れいむ「なんでおちびちゃんしんでるのおぉぉぉ!?」
だから言ったのに。あたると痛いって。
れいむ「ゆぅぅぅ!!おちびちゃんをころしたげすはせいっ！さいっ！だよ！」
れいみゅ「おかーしゃがんばりぇ！」
れいむはあたしにポヨンポヨンと体当たりしてきた。
でも大して痛くない。
まりさ「もう、いいや」
あたしは引き金を引く。
『パァンパァンパァン!!』
れいむ「ゆぶげっ!?」
れいみゅ「ゆびぇっ!?」
ーーーーサヨナラ。
『パァンッ！』

……疲れた。
早く帰って零士兄に褒めてもらおっと。
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ……

玄関の開く音が聞こえる。
どうやらまりさが帰ってきたようだ。
零士「ふいー、すっかり良くなった」
まりさ「ただいま零士兄♪」
零士「おかえりまりさ。ちゃんと買えたか？」
まりさ「カンペキだよ！だから褒めて褒めて♪」
零士「よしよし良くやった。えらいぞまりさ」
俺はまりさの頭を軽く撫でる。
零士「そういえばまりさ」
まりさ「なぁに零士兄？」
零士「お前さっきから顔赤いぞ？何かあったか？」
まりさ「え!?いや、これはね……」
『秘密だよ♪』
まりさはそう答えた。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

第十二話　龍次の生活

第十二話　龍次の生活
僕は霧島龍次。明日香の兄だ。
そして彼らと同じくハーフだ。
どんなゆっくりとのハーフだって？
もともと本来ならゆっくりレイセン（胴付き）が母親ならレイセンの遺伝子が遺伝されるはず。
けど僕は僕の祖母……　ゆっくり美鈴の遺伝子が隔世遺伝され、ゆっくり美鈴の能力が付与された。
ゆっくりの生態ってまだまだわからない事だらけだね。
つまり、こんな感じ。
僕→美鈴の遺伝子で格闘能力がかなり上がる、ちょっとやそっとじゃダメージは受けない。
明日香→レイセンの遺伝子で跳躍力が上がる。
ちなみに僕の家では二匹、いや二人の胴付きがいる。
a．m．6時。
龍次「ふあぁぁぁ、もう6時か……」
すると僕に一人の胴付きが抱きついてきた。
ふらん「龍次お兄ちゃ～ん♪おはよ～♪」
龍次「あぁ、おはようふらん」
ふらん「龍次お兄ちゃん、お姉さまがごはんできてるって」
龍次「わかった、すぐいくよ。けどさ」
ふらん「なぁに？」
ふらんが抱きついていて動けないんだよね、これが。
龍次「少し離れてくれるかい？」
ふらん「え～!!やだ!!龍次お兄ちゃん、お姫様抱っこして♪」
龍次「仕方ないなぁ、それっ！」（ヒョイッ）
ふらんをお姫様抱っこして僕はリビングに向かった。
リビングにて。
れみりあ「あら、今日は早いのね」

龍次「うん。なんかお腹空いちゃって」
ふらん「うー☆」
れみりあ「ごはんはテーブルに置いてあるわ。一緒に食べましょ？」
テーブルの上にはれみりあが作ってくれたトーストとコーンスープなどが置いてあった。
龍次「今日はれみりあが作ってくれたのかい？」
れみりあ「ええ。いつも世話をしてくれているお礼よ」
ふらん「ふらんも手伝ったんだよ～♪」
龍次「え!?」
れみりあ「ごめんなさい…… 止められなかったわ……」
龍次「うそ～ん……」
なんでかって言うと実はふらん、料理が下手であり、たまにヤバい料理を作るのでいつもはれみりあに作ってもらう事が多い。
龍次「とほほ…… まあ仕方ないか……」
れみりあ「が、頑張って……」
仕方がないのでふらんの作った料理を口に運ぶ。
龍次「もぐもぐ…… うっ!?」
ふらん「ねぇ、ふらんの作った料理おいしい？」
龍次「あ、あぁ。おいしいよ（汗）」
毎度いつもの事ながら…… 進歩してないな、これ。
午後。
ふらんは昼寝、れみりあはティータイム、僕はソファーの上でくつろいでいた。
龍次「さて、と、ふらん、れみりあ、ちょっとおいで」
れみりあ「何かしら？」
ふらん「なぁに龍次お兄ちゃん？」
僕は二人にあるものを渡した。
れみりあ「何これ？」
ふらん「なんかちっさいね」
龍次「開けてごらん？」

二人は小さな小箱を開ける。
れみりあ「こ、これ!?」
ふらん「わぁ～、きれいなティーカップだぁ♪」
僕が渡したものは二人が少し前から欲しがっていたティーカップだった。
龍次「どうだい？気に入ってくれた？」
ふらん「ありがとう龍次お兄ちゃん!!」
れみりあ「ほ、本当に貰っていいの？」
龍次「あぁ、いいとも」
するとれみりあは僕に抱きつき、こう言った。
れみりあ「龍次、大好きよ♪」
龍次「え、え!?」
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・

第十三話　そろそろ

第十三話　そろそろ
俺とまりさは口を揃えて言った。
零士・まりさ「「合コン？」」
雄吾「そ、合コン」
俺が聞くよりも早くまりさが質問した。
まりさ「雄吾さん、合コンって何？」
雄吾「あ、そういやまりさは零士とずっと一緒だったもんな」
零士「で？何故合コンに？」
雄吾「だってよ、零士とまりさもいい年だろ？そろそろパートナーとか見つけた方がいいんでね？」
そう雄吾が言うと、まりさは顔を赤らめた。
零士「う～ん、俺はまだいいかな」
まりさ「あ、あたしは・・・・・」
雄吾「零士、お前まだ大丈夫って言ってる内に手遅れになっても知らねぇぞ？」
確かに雄吾の言うとおりだ。
しかし、俺には恋愛というのを経験した事がない。
そもそも好みの女がいないんだよね。
ルーミア「あれ？まりさちゃん顔赤いよ？どうしたの？」
まりさ「え!?いや、何でもないよ!?」
ルーミア「ねぇ、もしかして零士さんの事・・・」
まりさ「そ、そんなことないよ!?だっ、大丈夫だから気にしないで!!」
ルーミア「そう？なら良いんだけど」
まりさは～、良くわからん。
俺にとっては家族みたいなものだ。
まりさが俺の事をどう思っているかはあまりわからない。
零士「それで？雄吾はどうすんだ？」
雄吾「俺は行くぜ」

零士「最後に失敗するのがオチだな」
雄吾「うるせぇ!!」
そして深夜。
俺とまりさは雄吾に無理やり合コンに連れていかれた。
雄吾「・・・・・。」
零士「・・・・・。」
まりさ「どうもはじめまして！」
雄吾、ガッチガチに緊張してんじゃん。俺も人の事言えないけど。
零士「え、えっとまずは自己紹介しようか」
人数は男二人、女二人か。男女比率はちょうどいいな。
しかし俺はすぐに違和感を感じた。
席が一つ空いているのだ。
ちなみに俺の前の席に座っている女性は《菊地　雛（きくち　ひな）》という活発的な女性だ。
さらに雄吾の前の席に座っている女性は《涼宮　凛（すずみや　りん）》という物静かな女性だ。
零士「え～と、席一つ空いているんだけど誰か来るのか？」
雛「そーだよ♪もう一人女子が来るよ♪」
凛「・・・・・。」
雄吾「凛さんは物静かだなぁ」
凛「さん付けはやめて。普通に凛でいい」
雄吾「あ、はい」
ちなみに何処で合コンをやっているかというと何処にでもあるファミレスで、だ。
するとファミレスに誰かが入って来た。
そして俺たちが座っている席にやって来る。
？「やっと見つけましたわ！不知火零士！」
零士「誰？」
？「忘れたとは言わせませんわ！あの時！」
・・・・なんか整理が追い付かない。
彼女が言うに俺の事を知っているようだ。

雄吾「おいおい、まずは自己紹介だろ？」
莉奈「申し遅れました、私は九条　莉奈（くじょう　りな）と言います」
零士「・・・・あっ」
ちなみにまりさは雛の話し相手になっている。
雛「へぇ～♪まりさって賢いんだね♪」
まりさ「えへへ、そんな事言われても・・・・」
雄吾は俺にこう質問した。
雄吾「お前、あいつ知ってるのか？」
零士「思い出したあああぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
雄吾「思い出したって何を？」
零士「確か1年前に護衛任務をした時、こいつがいたんだよ」
雄吾「ほぉ～、で誰なんだ？」
零士「九条財閥って知ってるか？」
雄吾「あ～、確か様々な国と交流をしているっていうあの九条財閥か？」
つまり、莉奈は九条財閥のお嬢様っていう事だ。
その九条財閥宅にドスまりさ率いる群れが襲ってきたというので俺が護衛に向かい、群れのゆっくり共が莉奈を襲っていたところを俺が助けたっていう訳。
雄吾「つまり、あの事件以来お前に惚れたと」
零士「俺はただ助けたかっただけなんだよなぁ・・・・」
雄吾「ハクレイさんと同じ事言ってんな」
零士「そうか？」
莉奈は俺を軽く小突き、こう言った。
莉奈「私を無視するとはいい度胸ですわね？」
零士「別に無視してる訳じゃないけど」
莉奈「しかしこの時を待ちわびたことか・・・・」
零士「何を待ちわびていたんだ？」
すると莉奈は俺に抱きついた。
莉奈「私のこの想いを零士、貴方に伝える事をですわ！」

零士「・・・・はぁ？」
まりさ「わぁお!?」
雄吾「おぉ!?」（期待）
凛「・・・・。」
雛「おぉ!?」（同じく期待）
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・

第十四話　答

第十四話　答

零士「え～と、つまり莉奈、お前は俺と一緒がいいのか？」

莉奈「そう！やっと貴方とこうやって話ができたのですもの！」

まりさ「ふえええええ・・・・・　どうするの・・・・？」

しかし、俺は次の答えを出した。

零士「莉奈が俺の事を好きだという事はわかった。けどすまない、俺は莉奈とは暮らせない」

莉奈「ど、どうして!?」

零士「俺や雄吾は任務がある。私情を挟んでまで一緒に暮らそうとは思えない」

雄吾「お、おい!?そこまでキツく言わなくてもいいんじゃないか!?」

しまった。

莉奈の表情をちらりと見てみる。

泣いていた。

零士（のわあぁぁぁぁぁ!!やっちまったぁぁぁ!!）

雄吾（アホだ）

零士「い、いや俺はそういう意味で言ったんじゃなくてその莉奈をあまり危険にさらしたくないわけであの」

まりさ「なんか大変そう」

雛「仕方ないよ、無意識とはいえあんなこと言っちゃったから」

しかし莉奈はすぐに笑顔を見せた。

莉奈「そっか、そういう事なら仕方ありませんわね♪」

零士「へ？」

まりさ（よかった、零士兄が変な誤解されなくて本当によかった）

莉奈「しかし零士！」

零士「何だ？まだあるのか？」

莉奈「私は必ず貴方を振り向かせて見せますわ！覚悟なさい！」

零士「お、おぉ・・・」

そして合コン終了後。

雄吾「ヤッフー！凛ちゃんと雛ちゃんの連絡先ゲットぅ!!」
零士「テンション高いなお前」
まりさ「まぁ、確かに雄吾さんにとっては良い事だったんだね」（汗）
零士「しっかし莉奈、お前大丈夫か？酔ってないか？」
莉奈「だいじょーぶよ～♪酔ってなんてないれすから～♪」
零士・まりさ（あ、こりゃダメだ。完全にできあがってる）
俺とまりさがそう思った時、目の前に野良ゆっくりれいむ一家が現れた。
れいむ「ゆっ、そこのくそじじいとくそかいどうつきはれいむたちにあまあまちょうだいね！」
れいみゅ「あみゃあみゃよこちぇーー！」
零士「まためんどくさいのが出たよ……」
その瞬間、莉奈の酔いがさめたようだ。
莉奈「あら、また来たの？」（泣）
零士「なんでお前泣いてんの？」
すると次の瞬間、驚く事が起きた。
れいみゅ「ゆっ、くしょばばあがないちぇるよ！おおぶじゃまぶじゃ『グシャッ！』ゆぎっぴぃ!?」
零士「え……」
まりさ「あわわわ…… 莉奈さん怒ってる……」
そう、れいみゅが莉奈に潰されたのだ。
しかも即死レベルで。
ゆっくりの最後の言葉も言わせずにれいみゅを潰したのだ。
れいむ「なんでおちびちゃんがしんでるのおおぉぉぉぉぉぉぉ!?」
赤れいみゅ「ゆぇぇぇん！きょわいよぉぉぉぉ!!」
莉奈「誰が…… 誰がババァだぁぁぁぁ!!」
さらに莉奈は潰しにかかる。
『グシャッ！ブチュッ！』
れいむ「ゆげっ!?」
赤れいみゅ「ゆびゅっ!?」
赤れいみゅは即死、れいむはかろうじて生きてる程度だ。

れいむは許しを請おうと必死に謝るが……。
れいむ「ご、ごべんなざい…… もうゆるじでぐだざい……」
莉奈「誰が許すかぁぁぁぁ!!」
『グシュッ!!』
れいむ「ゆげぇ…… も、もっとゆっぐりじだ『グシャッ!』ゆぎぃ!!」
れいむも最後の言葉が言えずに死んだようだ。
零士「なぁまりさ」
まりさ「なぁに零士兄」
零士「女って怖いね」
まりさ「うん……」
女の恐ろしさを改めて痛感した俺とまりさだった。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

第十五話　対話

第十五話　対話

零士「ドス？」

ハクレイ「そう、ドス」

俺はハクレイさんにドスについて教えられていた。

どうやら近くの山にいるドスまりさ三姉妹が街に行くため山を降りてくるそうだった。

零士「どうしてドスが街に？」

ハクレイ「恐らく人間にとって不利な条約でも結ぶつもりでしょうね」

零士「ところでハクレイさん、何でそれがわかったんです？」

ハクレイ「私に仲のいいドスがいるの。あの子から教えてもらったわ」

つまり、ハクレイさんは仲の良いドスまりさから情報提供してもらったという訳だ。

ハクレイ「会いに行ってみる？ドスに」

零士「あ、はい。俺もドスを見てみたいです」

ハクレイ「じゃあまりさを連れて行きましょうか」

ー加工所近辺の森林。

零士「こ、こんなところに群れが・・・・」

まりさ「すごっ！」

ハクレイ「そろそろかしら」

すると群れの中からゆうに3メートルはあるドスまりさがでてきた。

ドス「ん・・・・ハクレイ、ドスに何か用なのぜ？」

ハクレイ「ええ。ちょっとね」

零士「で、デカい・・・・」

まりさ「こ、これがドス・・・・」

ドス「ゆ？ハクレイ、そこの人間さんと胴付きは誰なのぜ？」

零士「ああ、俺は不知火零士」
まりさ「あたしはまりさだよ♪」
ドスに軽く挨拶をする。
この群れのドスはすごく賢いようだ。
ハクレイ「ところでドス」
ドス「何なのぜ？ハクレイ」
ハクレイ「貴方が言っていた事、詳しく聞かせてくれないかしら」
ドス「わかったのぜ。零士お兄さんとまりさにも聞かせてやるのぜ」
零士「すまない。恩に着るよ」
まりさ「どんなお話なの？」
ドスは語りだした。
ドス「あれは今から二週間前のことなのぜ。ドスたちはいつものように狩りさんをしていたのぜ。狩りさんをしていたときに１０匹ぐらいのゆっくりが現れたのぜ」
零士「１０匹？それだけか？」
ドスは話を続ける。
ドス「けれどひにちがたつにつれてそのゆっくりの数が増えてきたのぜ。そしてある日のことなんだぜ・・・・」
まりさ「何かあったの？」
ドス「ドスとは違うドスの三姉妹が群れに攻めてきたのぜ。しかもたくさんのゆっくりをつれて、だぜ」
零士「何ッ!?」
まりさ「た、たくさんってどのくらい？」
するとドスは口を重々しく開く。
ドス「・・・・・・　５００匹ぐらいだぜ」
零士「５００ぅ!?かなりの数じゃないか!!」
ハクレイ「それでも貴方は抵抗し、なんとか撃退に成功したと」
ドス「そうなんだぜ。でも多分今度は倍以上のゆっくりを連れてくると思うんだぜ」
零士「いいとこ見積もって１２００ってところか」

まりさ「何か対抗策を考えた方がいいんじゃ？」
するとドスの後ろかられいむ、ぱちゅりー、ありす、ちぇん、みょんが出てきた。
れいむ「ゆっ、人間さんこんにちわ！」
ありす「どうつきまりさもこんにちわ♪」
まりさ「こんにちは、れいむ、ありす♪」
どうやらここの群れはほとんどが善良らしい。
しかもぱちゅりーはもしかしたら金バッジを取れるんじゃないかってぐらい頭が良い。
ちぇんとみょんは胴無しだが戦闘能力が高い。
さらにその群れ特有の自警団を引っ張っているエリートでもある。
れいむは保育園・・・ なのか？そこの保母のような存在である。ありすはその手伝いだ。
零士「ん？これは・・・・・」
俺はある小さな物に目を向ける。
これは・・・・・ ゆっくりサイズの投石器か？
それにしてもかなり丁寧に作り上げられている。
零士「これ考えたのぱちゅりーか？」
ぱちゅりー「むきゅ、そうよ。人間さんのように遠い物に当てられるかなって思って作ったの。人間さんにも意見を聞きたいわ。どうかしら？」
零士「すごく丁寧に作り上げられているよ。後はこれを量産できれば・・・・・」
ぱちゅりー「となるとかなりの数のえださんとひもさんが必要になるわ。お兄さん、ひもさんをくれないかしら？」
零士「ああ、いいぞ。こんなのでいいか？」
俺はバッグの中から紐を取り出し、ぱちゅりーの前に置いた。
ぱちゅりー「むきゅっ!?こ、こんなにいいの!?」
零士「ああ、どうせ安物だしな。枝はいいのか？」
ぱちゅりー「むきゅ、今までたくさんのえださんを集めたからひもさんが必要だったの」

零士「そうか。俺も手伝おうか？」
ぱちゅりー「お気持ちは受け取っておくわ。でもぱちぇたちがやらないといけないから」
零士「すごいな。お前は」
そうしている内にハクレイさんは何やらドスと話しているようだ。
ハクレイ「じゃあドス、作戦を決めましょうか」
ドス「ゆん。わかったのぜ」
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・

番外編　雄吾とルーミア②

番外編　雄吾とルーミア②
深夜
ルーミアは雄吾の部屋に入ってくる。
ルーミア「雄吾お兄様は……　寝てるか」
雄吾「Ｚｚｚ……　Ｚｚｚ……」
ルーミアは雄吾の顔を覗きこむ。
ルーミア「雄吾お兄様の寝顔……　かわいい♪」
ルーミアは雄吾を起こさないようにベッドの上にのる。
ルーミア「今なら……　起きないよね？」
ルーミアはその身を乗り出す。
ルーミア「キ、キスしても……　大丈夫だよね♪」
ルーミアはゆっくりと唇を近づける。
あと１０㎝。
あと５㎝。

あと2㎝。
すると。
雄吾「う～ん、むにゃむにゃ……」
雄吾が寝返りをうつ。
ルーミア「あ……ま、いいか。後で気まずくなるだけだしね／／／」
雄吾の隣にルーミアが寝転び、少し微笑む。
ルーミア「一緒に寝るぐらいなら……いいよね♪」
ルーミアは軽い眠りについた。

午前7時
雄吾「う～ん、なんか体が重い……って!?」
ルーミア「すぅ……すぅ……」
雄吾「ホアアアアアアッ!?」Σ（゜□゜；）
もちろん近所のおじさんに注意されたのは言うまでもない。
雄吾「で？何故に俺の布団に潜り込んだわけ？」
ルーミア「だってぇ～♥　雄吾お兄様の寝顔、可愛かったんだもの～♪」
雄吾「それだけの理由でか……まぁ～いいや」
ルーミア「雄吾お兄様、朝ごはんにしましょ？」
雄吾「あぁ、そうすっか」

朝食中
雄吾「う～ん、暗いニュースが多いなぁ……」
ルーミア「仕方ないよ。一向に乱獲が減らないんだもの」
雄吾「そうだルーミア、今日はどこか出掛けたいか？」
ルーミア「ううん、雄吾お兄様と過ごせればそれで充分だよ♪」
雄吾「そっか。ならいいや」
ルーミア（雄吾お兄様の笑顔……カッコいいなぁ♪）
午後。

ルーミアは雄吾の入れてくれたココアに口をつけ、雄吾はいつも通りトレーニングに励んでいた。
雄吾「ん～、もう少し重さを増やすか・・・・」
ダンベルの重さを調節する雄吾。
ルーミア「う～ん♪おいしい～♪やっぱり雄吾お兄様の入れるココアは最高ね♪」
雄吾「喜んでくれて嬉しいぜ！」
ルーミアには雄吾に対して感謝の気持ち以外に別の感情がある事はルーミア本人は知っていた。
しかし、伝えたくても伝えられない。またあの時のように拒絶されるかもしれない。
けれど、伝えたい。
ルーミア（雄吾お兄様・・・・　私、いつか雄吾お兄様に必ず伝えたい。今はまだ無理であっても・・・・　いつか少しでも落ち着いたら言いたいの）

『大好き』だって。

雄吾「ん？何か言ったか？ルーミア」
ルーミア「う、ううん！何でもない！」
雄吾「そっか♪よし続き続きっと・・・・」
ルーミア（でも、その鈍感は直してくれたらなぁ～）
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・

第十六話　討伐　前編

第十六話　討伐
ハクレイ「じゃあドス、この作戦ならどう？」
ドス「ゆ～ん、これじゃあすぐに気づかれて作戦がテケレッツのパァなんだぜ」
ハクレイ「ドス、そんな言葉何処で覚えたのよ？」
ドス「加工所の人間さんがよく言ってたのぜ」
どうやらハクレイとドスは作戦案に苦戦しているみたいだ。
零士「じゃあ、わざと誘き寄せればいいんでね？」
ドス「そこからどうするのぜ？」
まりさ「だったら！投石器使えばいいじゃん♪」
ハクレイ「そうね。今のところその作戦が妥当ね」
ドス「じゃあやってみるのぜ」
そして、作戦内容は群れ全体に知れわたり、街にゲスドス三姉妹が入ってこないように防衛準備が進められた。
ぱちゅりー「むきゅ～！急ぐのよ！早くしないとアイツらが攻めてくるわ！」
みょん「わかったんだみょん！ちぇん、急ぐみょん！」
ちぇん「わかったんだよー！今急いでるんだよー！わかってね～！」
零士「さて、んじゃ俺も準備するか」
まりさ「ねぇ零士兄！あたしは何したらいい？」
とりあえずまりさにはドス達の手伝いに行かせた。

そして、ついにその瞬間が訪れた。
ゲスドス（長女）「ゆふふっ、やっと着いたのぜ！」
ゲスドス（二女）「あとはくそにんげんをどれいにすればかんぺきなんだぜ！」
ゲスドス（三女）「ゆぷぷぷっ！くそにんげんのあわてふためくすが

たがめにみえるのぜ！」
ゆっくり「ゆおぉぉぉ！どすすごいよ！どすさえいればくそにんげんなんてこわくないよ！」

草むら
ドス「・・・・ 零士お兄さん、もしドスに何かあったら・・・」
零士「心配すんな。俺らでボコボコにしてやろうぜ」
ドス「頼もしいね、零士お兄さんは。・・・・ あ、そうだ」
零士「ん？どした？」
ドス「零士お兄さん、これ」
そうしてドスから渡されたのは・・・・・
零士「ＹＰＧ!?なんでドスが!?」
ドス「ＹＰＧってなんなのぜ？」
零士「対ゆっくり用手榴弾、ＹＰＧだ。なんでドスが持っていたんだ？」
ドス「加工所のおじさんからもらったんだぜ。護身用にって」
零士「俺がもらっていいのか？」
ドス「もらったのはいいけど使い方が分からないんだぜ。だから零士お兄さんが使うべきなんだぜ」
零士「ありがとなドス、感謝するよ」
ドス「役にたてて欲しいんだぜ」
零士「わかった」
その頃まりさは。
まりさ「よ～し、零士兄からディクテイターを借りたし、準備万端！ぱちゅりー、そっちはどう？」
ぱちゅりー「むきゅ、こっちも準備が終わったわ。後は向こうが何を仕掛けてくるのか様子見ね」
ハクレイ「さて、久しぶりに暴れるわよ～、ストレス発散に丁度いいわ」
そしてついに。

ゲスドス（長女）「じゃあいくんだぜ！」
ゆっくり「ゆっ、ゆぉぉぉ！」
零士「来やがったな？コイツで一掃してやる！」
俺は《対ゆっくり用連装砲　ケルベロス》を展開し、構えた。
零士「さあ、パーティーの始まりだ！」
防衛戦の火蓋が切って落とされた。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・